

# 幼児の運動能力調査を行う保育現場の実態

弘中陽子<sup>\*1</sup>・重村美帆<sup>\*1</sup>

(<sup>\*1</sup>宇部フロンティア大学短期大学部保育学科)

Current situation of nursery schools observed through  
the examination of infants' motor ability

Yoko Hironaka<sup>\*1</sup> and Miho Shigemura<sup>\*1</sup>

(<sup>\*1</sup>Department of Nursery Education, Ube Frontier College)

平成24年3月に文部科学省が「幼児期運動指針」を公表し、全国の幼稚園・保育所へ指針の通達とともにガイドブック等の配付を行ってから久しい<sup>1)</sup>。保育現場において、普段の保育の中に楽しく体を動かす遊びを取り入れているものの、子どもの体力や運動能力の効果や成果の検証までは十分ではないことが報告されている<sup>2)</sup>。そこで、本研究では、幼児の運動能力調査の実施を通して、運動能力調査を行う保育現場の実態を明らかにしていくこととした。本研究において実施した運動能力調査では、U市内29園中実施協力した園は8園、全体の約3割にとどまる結果であった。しかし、スタッフ協力があれば実施可能と手を挙げた園もあり、自園単独での実施には不安があるものの、実施に対する理解が見られた。こうした保育現場における不安要素を少しでも軽減し、定期的な運動能力調査の実施に繋いでいくためにも、各園における実施に至るまでの手続きや方法の工夫とともに、学生スタッフの派遣協力の実施のあり方等、われわれ研究者の保育現場との協力体制について検討を進めていきたい。

キーワード：保育，子ども，幼児期運動指針，幼児の運動能力調査

## 1. はじめに

文部科学省は、平成24年3月「幼児期運動指針」を策定し、全国の幼稚園、保育所に指針を通達し、ガイドブック、及び普及パンフレットの配付<sup>1)</sup>を行ってから久しい。

この幼児期運動指針は、心身の発育に極めて重要な幼児期にも関わらず、全ての幼児が体を動かす機会に十分恵まれているとはいえない現状において、運動習慣の基盤づくりを通して、幼児期に必要な多様な動きの獲得や体力・運動能力の基礎を培うとともに、様々な活動への意欲や社会性、創造性などの育みを目指すものである。指針のポイントとして、①多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れる、②楽しく体を動かす時間を確保する（毎日合計60分以上）、③発達に応じた遊びを提供する、以上の3点を掲げている<sup>3)</sup>。

る<sup>3)</sup>。

幼児が自発的に体を動かして遊ぶ機会を十分保障することを実現するためには、保護者や保育者をはじめ、幼児に関わる人々が幼児期の運動の捉え方、及び実施方法を共有する重要性を挙げ、ガイドブックにおいて、実際に子どもと関わる保育者や保護者を念頭においたちょっとした遊びの工夫等の実践例が具体的に記載され、わかりやすく解説されている<sup>3)</sup>。

この幼児期運動指針公表後、こうした運動遊びの取り組みが積極的に行われると同時に、それらの効果や成果の検証の必要性が更に増すと考えられていた<sup>2)</sup>。

しかし、村瀬ら（2013）の調査の報告によると、保育現場において体力や運動能力の評価の必要性は一定の割合で認められてはいるものの、実際の実施が十分に行われていない現状が明らかとなったと述べている<sup>2)</sup>。

以上を踏まえ、幼児期の体を動かす習慣の基盤づくりにおいても、保育現場での幼児の体力や運動能力測定の実施を啓発していく必要があると考えた。

そこで、本研究ではA県保育協会U支部の研究活動として取り組んだ幼児の運動能力調査の実施を通して、保育現場における運動能力調査の実態を明らかにすることとした。

## 2. 研究方法

平成25年度から平成27年度の3年間にわたり、A県保育協会U支部が取り組む研究活動において、研究アドバイザーとして研究活動の助言・指導に携わった。

U支部では、「からだを動かす遊びを楽しむ子どもの育ち～幼児期運動指針を軸に～」を研究テーマに、U市内にある公立・私立保育所合わせ29園全園において、からだを動かす遊びの保育実践を1年間取り組んだ。その中で、からだを動かす遊びによる子どもの育ちの変化を客観的にみるために、幼児を対象とした運動能力調査を実施した。併せて、U市内の保育所に通う子どもたちの運動能力の実態と傾向の把握を試みることとした。

この運動能力調査実施に携わった指導内容を3つの段階、「準備段階・実施段階・集計と分析段階」に分けて報告し、U市の運動能力調査の実態から保育現場の運動能力調査のあり方について考察する。

## 3. 幼児の運動能力調査について

幼児期運動指針ガイドブック(2012)には、「幼児の運動能力調査とは、4,5,6歳児の幼児を対象とした、25m走、立ち幅跳び、ボール投げ等6つの項目で構成するテストのことである」<sup>4)</sup>と記載されている。このテストは、比較的容易に実施できかつ、「走る」、「跳ぶ」、「投げる」といった基本的な動きに基づく運動能力がどのくらいなのかを客観的に知ることができるものとしている。また、測定の結果は、標準化された5～1点で評価できるとともに、6項目の合計点において全国の幼児と比較した発達水準を確認することもできると述べられている。ちなみに、6項目の合計点も5～1点に区分され、発達が標準より非常に進んでいる：5点から、発達が標準よりかなり遅れている：1点と説明されている<sup>4)</sup>。

そして、新体力テスト(小学校以上対象)にも系統

性ある項目が多く含まれていることから、将来的に一貫した評価が可能であることも示している<sup>4)</sup>。

U支部の運動能力調査は、このテストを採用し、文部科学省(2011)「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」に記載されている実施要項<sup>5)</sup>に基づいて調査を行った。

## 4. 研究結果

### 4-1. 準備段階

この段階では、平成26年度の本調査、つまり運動能力調査の実施に向けた事前準備として、次の3点を中心に進めた。

- 【平成25年度】平成26年度本調査の前年度
- ・実施希望調査の実施
  - ・協力園へ調査の概要説明
  - ・協力園への訪問による事前打ち合わせ

運動能力調査の希望調査をU市29園全園に対して行った結果、園独自で実施すると回答した園は6園、スタッフ協力があれば実施可能と回答した園は9園であった。その9園のうち、学生の授業時間等を考慮した上で、大学からの交通手段があること、及びできるだけ所要時間が短時間であることを条件に、公立・私立それぞれ各1園の2園に決定した。

#### 4-1-1. 運動能力調査事前打ち合わせ

U支部内における運動能力調査の実施状況として、約30年前に同様の保育大会に向けた研究活動として実施したことは明らかになっているものの、その後、継続的に実施をしている園は1園のみであり、ほとんどの園で実施されていない状況であった。ただ、継続的に実施をしている園においても、園独自で選んだ種目と方法を用いたものであった。

こうした状況も踏まえ、調査協力園8園すべてが同じ方法で、統一的に、且つ円滑に実施できることを目的に、事前訪問をし、園の状況を踏まえた実地指導を行った。限られた時間内での事前訪問のため、できるだけスムーズに打ち合わせができるよう、訪問前あらかじめ確認事項に関する文書を送付し、事前準備を整えてもらうことを依頼した。

確認事項として挙げた3点は、次のとおりである。

- ①各測定項目の実施方法について
- ②実施場所、及びスペースの確認
- ③調査に用いる物品の確認

尚、協力園には、あらかじめ調査実施要項を示し、それをもとに準備を進めてもらうこととした。調査で用いた実施要領は、「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書」(文部科学省, 2011)<sup>5)</sup>に記載されている「幼児運動能力調査 調査実施要領」である。この実施要項に基づいて準備を進めるものの、各園の園環境の違い

や保育者の理解による差異は否めない。なかでも、調査に用いる物品については、できるだけ統一を図るため、持参した見本品と園で準備している物品とを見比べ、備品チェック表を用いて種目ごとに確認を進めた(図1)。

また、実際にその園の子どもたちによる調査のシミュレーションを行い、安全の確保、及び測定者の留意点(保育者の位置や声かけ等)について具体的に助言・指導を行った。

幼児の運動能力調査 備品チェック表 [ 保育園 ]

種目	場所	必要備品	確認
25 m走	屋外 (30 mの直走路)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・旗 (スタート合図用 1本)</li> <li>・ストップウォッチ</li> </ul>	
ボール投げ	屋外 (15 ~20 mの直線)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ソフトボール教育1号: 2個以上 (周囲 26.2 ~27.2cm, 重さ 136 ~146g), または硬式テニスボール (公認球) 2個以上</li> <li>・メジャー</li> <li>・ライン引き</li> </ul>	
立ち幅跳び	屋内	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メジャー (1.5 m~2 m)</li> <li>・ビニールテープ (踏み切り線用)</li> </ul>	
両足連続跳び越し	屋内 (約 5 mの直線)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メジャー</li> <li>・積木: 10個 (およそ幅 5cm, 高さ 5cm, 長さ 10cm) (もしくは, 同じ大きさのスポンジ)</li> <li>・ビニールテープ (スタートライン, 印用)</li> <li>・ストップウォッチ</li> </ul>	
体支持持続時間	屋内	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児が立って腕を体にそって下げたときに肘の高さ (約 70 ~75cm) ぐらいの机 (または巧技台)</li> <li>・ビニールテープ (手の位置用)</li> <li>・補助台 (机の上に手を置いた時に, 両肘が伸びて「用意」の姿勢がとれるような高さの台)</li> <li>・ストップウォッチ</li> </ul>	
捕球	屋内もしくは, 屋外	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴムボール: 2個以上 (おおよそ直径 12 ~15cm, 重さ約 150g)</li> <li>・スタンド(高さ 170cm以上のもの, 玉入れ用のポール等)</li> <li>・テープ又は紐 (布製がよい)</li> <li>・ビニールテープ (投げる位置, 捕る位置用)</li> </ul>	

図1 幼児の運動能力調査 備品チェック表 (著者作成)

実際に行った主な指導内容を種目別に示した。

**【25m走：30mの直走路の確保について】**

各園がもつ園庭の広さや環境はさまざまであるため、30mの直走路の確保はなかなか難しい状況であった。園庭の斜めの長さを使用したり、もしくは助走分の5mによる調整等を図り、できるだけ30mの距離を確保することを求めた。しかし、工夫を凝らしたとしても確保が難しい園においては、子どもたちの安全、かつ安心して走ることができる環境を園周辺において整えた上で実施するように指導を行った。尚、参照した実施要項にも、代替種目として示してある「往復走」があるが、今回の調査では実施せず、できるだけ25m走を実施していく方向で指導を進めた。

**【ボール投げ：使用するボールの選定について】**

測定用具の購入は各協力園に委ねられていたため、手に入れやすい公式テニスボールを使用することとした。事前打ち合わせ時に、各園で準備したボールを確認し、そのボールを使用した測定のシミュレーションも行った。特に、注意点として、上手投げの手本を見せるとともに、構えをした際の手と逆の足が出ているかどうか、子どもが投げる先に立ち、子どもに方向がわかるよう手を挙げて具体的に示す等実践的に指導を行った。

**【立ち幅跳び：マットの活用方法について】**

本来実施要項には床での測定となっていたが、子どもの安全性を考慮しマットを活用した。マット上で跳ぶことによりマットがずれる可能性があるため、テープでしっかり固定することを指導した。また、計測用のメジャーにおいても、子どもに直接触れるものであるため、工具用のものは避け柔らかい素材のものを使用するように併せて指導を行った。

**【両足連続跳び越し：積木の代替えについて】**

うまく跳び超えられず、積木を踏んだ場合を想定し、できる限り危険性が小さくなるよう、今回の調査においては積木と同様の大きさのスポンジを代用として使用した。あらかじめ筆者作成の見本を示しておき、製作は各園に委ねたため、実際に製作したものの大きさや形、安全性等について確認を行った。

また、両足が揃っていない、あるいは跳び越していない場合の測定のやり直しについては、シミュレーションの場面を用いて具体的に説明を行い理解を促した。

**【体支持持続時間：既定の高さの机の選定について】**

既定の高さのある机の見当たらない園では、園内に

ある事務机やオルガン等を代用し実施をすることとした。ただし、測定に不都合が起きぬよう物の向きや配置の仕方等にも注意を払うよう指導を行った。

また、シミュレーションにおいて、思わず保育者が時間を気にするあまり「あと〇秒よ」等の具体的な時間を投げかける場面も見られたため、保育者の言葉かけについて注意を促した。

**【捕球：使用するボールの選定について】**

ボールは、実施要項に記載のある大きさ・重さを確認し、各園での準備とした。できるだけ統一を図るため、持参した見本の大きさや重さをもとに、ボールの選定の助言指導を行った。

**4-2. 実施段階**

この段階では、前年度の準備段階を踏まえ、それぞれの協力園において調査実施に臨んだ。

**【平成26年度】本調査**

- ・協力園での調査実施
- ・調査終了後、記録用紙の提出
- ・実施に関する意見の提出、集約

1年間のからだを動かす遊びの保育実践における子どもの育ちの変化をみるために、保育計画に合わせて2回調査を行うこととした。まずは、保育実践の取り組み始めの時期である1期（春）に1回目、そして終わりの時期である4期（秋）を2回目とした。

尚、あらかじめ決めた調査時期の中で、できるだけ間をあけず2～3日間で実施することを調査協力園内で共通理解を図った。

調査時期、及び測定項目、調査対象児、及び人数については次のとおりである。

**【調査時期】**

- 測定1回目（春）：平成26年4月14日～5月31日
- 測定2回目（秋）：平成26年10月14日～11月29日

**【調査実施園】**

8園（その内、学生スタッフ協力2園）

**【調査場所】**

各園の園庭及び周辺、園舎内

**【測定項目】**

6項目（25m走、ボール投げ、立ち幅跳び、両足連続跳び越し、体支持持続時間、捕球）

**【調査対象児】**

年中・年長児（4歳児前半～6歳児後半）

【調査対象児数】年中・年長児合計数

測定1回目（春）：男児170人・女児179人

測定2回目（秋）：男児174人・女児178人

本学の学生がスタッフとして調査に臨むにあたり、まずは事前学習として、幼児期運動指針の解説、及び幼児の運動能力調査の必要性や実施方法の理解を行った。また、実際の測定を想定し、子ども役と測定役に分かれ、種目の説明や見本の見せ方、及び測定時の声のかけ方等留意点も含めて、実践練習を重ね実施に臨んだ。尚、学生スタッフの派遣については、U支部会長より本学学長への派遣依頼を通じて実現したものである。

役割分担は、測定方法の説明、及び測定を学生スタッフ2～3名が担当し、子どもたちの誘導や見守り、そして測定値の記録を園の保育者1～2名が担当して行った。その際の調査実施の様子は次のとおりである。これは平成26年5月28日、U市内の保育園にて実施したものである。



図4 立ち幅跳び



図5 両足連続跳び越し



図2 25m走



図6 体支持持続時間



図3 ボール投げ



図7 捕球

### 4-3. 集計と分析段階

この段階では、調査実施後に提出された記録用紙をもとに著者研究室にて測定値の入力、及び分析を行った。

【平成 26 年度】本調査

- ・記録用紙をもとに測定値の入力及び、分析
- ・研究事務局会議における園別の結果報告
- ・保育士研修会における「運動能力調査結果報告」

すべての集計後、調査協力園ごとに、種目別の測定値の平均値、及び得点の平均値を算出した。

この集計結果は、調査対象児別（年中児と年長児）、測定1回目（春）と測定2回目（秋）にまとめ、作成した表をU支部の研究事務局会議にて提出し報告を行った。調査協力園の平均値では、園によって数値の大きさに差はあるものの、年中児・年長児ともに、1回目（春）よりも測定2回目（秋）の想定値が伸びていることについて触れ、種目にも慣れ、要領も得たことが測定値の伸びにも繋がったのではないかというひとつの見解を説明した。尚、グラフ化していくにあたり、できるだけ春から秋にかけての変化が分かるように矢印や測定値の変化を数値で表した。作成した図は下に示した（図8）。

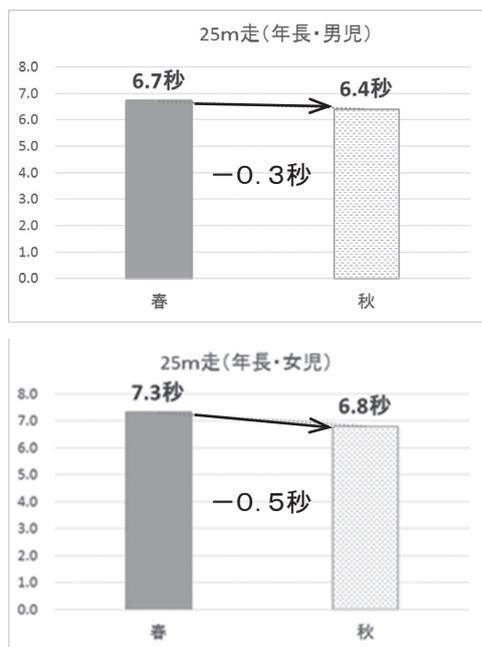


図8 U市幼児の運動能力調査結果「25m走（年長・男児女児）」（著者作成）

こうした中、対象児ごとの春から秋にかけての変化だけでなく、「U市の傾向が知りたい」「全国との比較がみてみたい」等の意見が挙がったため、さらに種目ごとの全国比較を加え、分析を進めることとした。また、「測定結果は、得点よりも測定値の方が分かりやすい」という意見もあり、分析においては測定値のみを使用することとした。

今回使用した全国平均は、森ら（2011）が「幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践的介入」において報告した平均値（2008年）を用いた<sup>6)</sup>。

この全国平均では各年齢区分を月齢6ヶ月で前半・後半と示し平均値を算出していた。それに合わせ、U市の平均値も算出し、全国平均との比較を図9のようにあらわした。

## 5. 考察

運動能力調査の実施に携わった3段階に沿って考察を行うこととする。

### ①準備の段階

実際に、調査協力園として調査を実施した園は、29園中わずか8園にとどまった。しかし、事前希望調査において、「自園での実施可能」6園に加え、「スタッフ協力があれば実施可能」と手を挙げた園が9園あった。このことから、調査実施に関心はあるものの、実際に実施をしたことがなく、自分たちで行うことに対する不安等から「スタッフ協力」を求めたのではないかと考える。

また、事前訪問による事前打ち合わせでは、各園において実際の測定場面をシミュレーションし、そこから出てきた疑問や注意点等をもとに具体的な助言指導を心がけた。あらかじめ文書等で実施要項を示してはいたものの、実際に使用する測定用具の選定や測定方法、人員配置にはっきりとした確信がもてない中、実際の現場による実践的指導により、実施に関する疑問や不安が軽減されたと考える。こうした疑問点や不安の解消が、実施に向かうステップとなったと考える。

### ②実施の段階

実施日程は園によって異なるが、あらかじめ決めた期間内で、尚かつ、間をあけずできるだけ連続した日程で行った。1日に測定できる種目数も限られ、また天候や欠席等により測定できなかった子どもの対応等も踏まえると、調査の実施には2日から3日

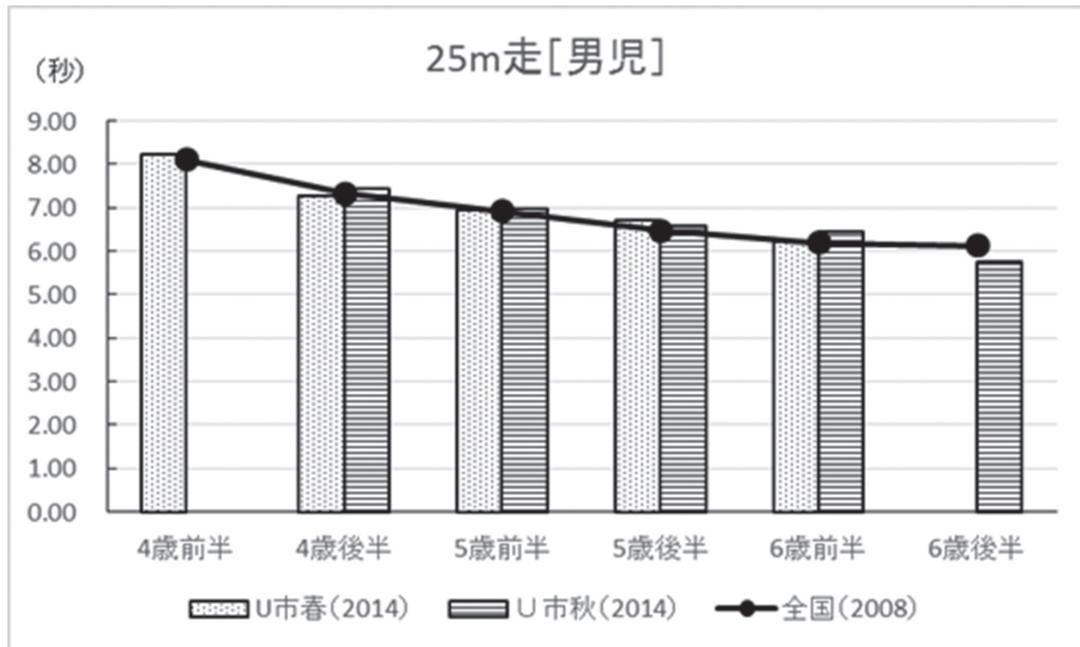


図9 U市幼児の運動能力調査「25 m走 全国比較 (男児)」(著者作成)

程度の日数を要することも明らかになった。

また、測定には多くのスタッフが必要となる。今回の実施においては、1種目につき測定者1～2名、記録者1名、子ども対応1名、最大4名程度であった。中でも、順番を待つ子どもや嫌がる子どもへの配慮や測定中の子どもへの応援等、子ども対応スタッフの重要性が示された。できるだけ子ども一人ひとりの力が最大限、いい形で発揮できるように人員の確保が重要であると考えられる。

実施要項によると「全体を総括する者を1名おくことが望ましい」<sup>5)</sup>との記載もある。今回の実施においては明らかにしていないが、円滑な実施のための役割分担、及び体制づくり等運営のあり方も十分検討した上で、取り組むことが求められてくる。

### ③集計と分析段階

今回はU支部の研究活動として、筆者研究室にて「春と秋の比較」、及び「全国平均との比較」の分析を行った。こうした測定値の整理、及び測定値のデータの解釈が子どもの育ちや保育実践にも繋がっていくことと考える。実際、継続的に独自の方法で実施している園においては、子ども一人ひとりの測定値を「春と秋の比較、昨年度との比較」として示す程度にとどまっているようだ。保育現場において、測定値をデータ化し、分析していくことは通常の保育業務がある中で大変難しいことが推察できる。

## 6. まとめ・今後の課題

保育現場が抱える実施に至るまでの不安要素がいくつか明らかになった。特に、調査実施に慣れていない中、調査用具や測定方法に関する不安が、今回の調査にて表れてきたのではないかと捉えている。また、調査日程や測定の所要時間やスタッフ数等の点からも、実施上の保育現場の負担の大きさも垣間見れた。

一方、運動能力調査直後に行った、実施に関する保育者アンケートからは、「普段の保育の中に運動遊びを取り入れるきっかけとなった」「意識的に子どもと一緒に遊ぶ時間や機会が増えた」「運動能力についてぼんやりと理解していたことが個々の能力の把握等に繋がった」など、子どもの運動能力や運動遊び、からだを動かすことに対する意識が肯定的な理解へと変化していることをみることができた。こうした保育者の意識の変化が子どもたちの運動習慣の基盤づくりやきっかけづくりの一助に繋がることを踏まえると、保育現場での幼児の運動能力調査に取り組む必要がある。そのためにも、本研究から明らかにされた保育現場が抱える不安要素を軽減することが課題であると言える。

春日(2014)は、幼児期運動指針の普及戦略のひとつとして、体育の専門家がいらない保育現場であるからこそ、われわれ研究者の介入と科学的知見を分かりやすく提供することの重要性について述べている<sup>6)</sup>。

また、保育者養成校における幼児期運動指針の意図や内容の教授の必要性についても触れている<sup>6)</sup>。

つまり、研究者の立場として保育現場への介入、及び連携のあり方と、保育者養成の立場としての幼児期運動指針と運動能力調査の実施方法の教授の必要性が問われていると考える。こうした実施のノウハウを持ち備えた保育者養成の輩出に結び付けるためにも、保育現場での実際の実施経験は何よりも大きな学びの場となる。この学生スタッフの派遣は、人員確保を求める保育現場と調査の実地経験を学ぶ保育者養成校の連携を図るひとつの方法であると考え。

以上のことから、今後、幼児の運動能力調査の必要性の啓発も含め、保育現場において継続的に調査の実施に繋がるための保育現場との協力体制について検討を進めていきたい。

## 謝辞

最後に今回のU支部における幼児の運動能力調査に携わる機会を与えてくださったU支部会長はじめ保育士会のみなさま、そして調査実施にご協力いただきました調査協力園の諸先生方と子どもたち、学生スタッフのみなさまに心より感謝申し上げます、末筆ながら御礼申し上げます。

## 7. 参考文献

- 1) 文部科学省：幼児期運動指針，2012.
- 2) 村瀬智彦・春日晃章・中野貴博：保育現場における体力・運動能力評価基準値の利用について，愛知大学体育学論叢，20，1-7，2013.
- 3) 文部科学省 幼児期運動指針策定委員会：幼児の運動能力調査，幼児期運動指針ガイドブック～毎日，楽しく体を動かすために～，29-35，2012.
- 4) 文部科学省 幼児期運動指針策定委員会：幼児の運動能力調査，幼児期運動指針ガイドブック～毎日，楽しく体を動かすために～，52-53，2012.
- 5) 文部科学省：体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書，第3章1 幼児の運動能力調査（調査2），98-105，2011.
- 6) 森司朗・杉原隆・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮：幼児の運動能力における時代推移と発達促進のための実践的介入，平成20～22年度文部科学省科学研究補助金（基盤研究B）研究成果報告書，8-9，2011.
- 7) 春日晃章：幼児期運動指針の普及戦略，体育の科学，64（12），868-872，2014.